

1940
D-45 *serial number 75596*

1940
OOO-45 *serial number 75970*

1940年に生産されたD-45とOOO-45。

どちらもフィンガーボードのポジションが

ヘキサゴン・インレイを採用した

スタンダードな仕様であるが

これらのギターが生産される前年に

スノウフレイクやキャッツアイから

このヘキサゴンに変更された。

戦前戦中に生産されたD-45のブリッジプレートは

小さめのメイプル材を使用している。

1940年に生産されたD-45は19本

そしてOOO-45は6本。

同じ年に生まれた2本の最上位モデルが

70数年の歳月を経て日本で巡り会った

奇跡の写真である。





1940
D-45

serial number 75596





1940
OOO-45

serial number 75970



「とにかく、若い頃からずっと
憧れていましたから」



中北 英紀

Interview

Part. 1

アコースティック・ギターに魅せられ、気に入ったギターを入手しているうちに、十数本のギターを所有していた、というギリストは決して少なくない。しかし、80本を超えるプレミアム・ギターをコレクションしている人は、それほど多くはないだろう。中北英紀氏は、そんな数少ないアマチュア・ギタリストの一人。彼のコレクションは、様々なスタイルのフラットトップからヴィンテージのフルアコースティック、カスタムメイドのセミアコなど多岐に渡り、音楽室と化した自宅の地下室を占領している。中でも圧巻なのは、プリウォーのフラッグシップ・モデルを数多く含むヴィンテージ・マーティン・コレクション。今や専門ショップでもなかなか見掛けることのない希少なフラッグシップ・モデルがズラリと並んでいるさまは、正に圧巻の一言。ここでは、それらマーティン・コレクションの紹介と、中北氏のギターに対する熱い思いを語って頂いた。

ドレッドノートに
ミディアム・ゲージ弦

最初にマーティン・ギターを購入したのはいつ頃ですか？

最初に買ったのは92年です。アコースティック・ギターは昔からずっと弾いていたのですが、ヤマハやSヤイリといった国産のギターばかりでした。やはり昔マーティンは高嶺の花でしたよ。92年に若い頃よく行ったお茶の水の楽器店に10数年ぶりに寄ってみたら、マーティンの平行ものD-18とD-28が安く売られていたんです。それで、「あっ安い！」と思って2本とも買って帰ったのが最初です。

最初から大人買いですね(笑)。

(笑)いや、その時は本当に安かったんですよ。で、しばらくはその2本を喜んで弾いていたのですが、半年ほどしてから000-28の1949年製ヴィンテージに出会って…。弾いてみたら、自分のマーティンと全然違う音なんです。それで「なんだこれは！」って…(笑)。その000-28は、ボディトップにクラックが入っていて見た目は良くなかったのですが、とにかく音が良いんです。買ってからトップを修理して、今も愛用しています。その後40年代のD-28に出会って、それからはもう…(笑)。

92年というと、クラブトンが「アンブラグド」をリリースした年ですが、やはりクラブトンに憧れて？

いいえ、僕はあまりクラブトンを聞かないんです(笑)。音楽は昔から大好きなのですが、聴くのは主にクラシックで、自分でやるのはポップスです。まあ、フィンガーピッキングのインストものもよく聴いていましたけどね。

最初は新しいドレッドノートを買って、その後ヴィンテージの000の良さに気が付いたわけですね。

そうです、でも私はどちらのモデルも好きなんですよ、今でも。よくライブの時には、両方使っていました。最初に購入したD-18は、豆カンナを使って、自分でブレッシングをスキャロップに改造しました。やや素っ気なかった音が、だいぶ分厚くなりましたよ。

サウンドホールから手を入れてブレッシングを削っても、上手く削れないでしょ？

いやいや、ちゃんと削れますよ。きれいに仕上がっています、ホントです(笑)。

(笑)。ドレッドノートと000モデルのサウンドの違いに関しては、どのような印象ですか？

ドレッドノートの方が、やはり迫力がありますね。私はドレッドノートにミディアム・ゲージの弦を張っているので、「ドカン」と弾きたい曲で使います。でも000も好きなので、どっちがどっちって言えないですね。

それでこんなに沢山のギターが…(笑)。

そうかも知れないな〜。あと12弦ギターも好きだし…(笑)。

そう言えば、12弦のマーティンを3本もお持ちですね！

そうですね、12弦は好きなんです。マーティン以外にも何本かあります。昔ある楽器店のアコースティック・ギター・コンテストに出場したことがあって、その時に優勝したオーストラリア人のギタリストが、12弦をオープンDにチューニングして弾いていたんです。それが凄く良くて、それで12弦ギターに興味を持ったんです。12弦のオープン・チューニングって、アンサンブルだとなじみがないけど、ソロギターで弾くと凄く

綺麗です。

12弦ギターのオープン・チューニングだと、弦のテンションが緩くありませんか？

そうですね。ですから僕は12弦ギターにもミディアム・ゲージを張っているのですが、その辺は問題ないです。レギュラー・チューニングだとミディアムはテンションがきついで、オープンだと丁度良いです。

中北さんは、多くのギターにミディアム・ゲージを使用しているようですが、太めの弦の方がマーティンらしい音になりますか？

そうですね。ある程度太くないと思いつき弾けないし、マーティン本来の音が楽しめないでしょ。

OMは、男っぽい OOOっていう感じ

1969年製のD-45を2本お持ちですね。

これはもう20年近く前に買ったんです。1本は、大阪のある楽器店で見つけたんですが、仕事でどうしても買いに行けなかったんで、送ってもらいました。通販です(笑)。トップにクラックが入っていたので、ちゃんとリペアをして今も使っています。

なぜ69年製のD-45を購入しようと思ったのですか？

最初は69年のD-41を入手したんですよ、珍しいこともあって。しばらくはその41で充分満足していたんです。45とそんなに変わらないだろうと思って。でも、実際に同じ年の45を弾いたら、煌びやかさが全然違うんですよ(笑)。僕のD-41は、28をちょっと爽やかにしたようなサウンドなんですけど、45はもっと煌びやかで、下も“ドーン”って出ます。D-28やD-41とは違う45特有の音があるんです。実はその前から72年のD-45を持っていたんですけど、69年と弾き比べたら、かなり音が違うので、69年製も買いました。

しかし、同じ年に作られた同じモデルを2本所有するというのは・・・。

D-45はキラキラした高音域と“ドーン”と鳴る低音域が特徴なのですが、その中でも繊細でブリリアントに鳴る45と、もっとギラギラしたちょっと荒いトーンの45があるんです。もちろんその中間の45もあります。僕の45は確かに同じ年に作られてはいますが、かなり音が違うんです。だったら、同じ年だけ2本あっても良いかなと・・・。

同じ年のD-41とD-45を持っている方はいますが、45を2本とは贅沢ですね(笑)。

そうですね(笑)。69年のハカランダ製のD-41は、実は31本しか作られていないそうで、かなり珍しいです(インディアン・ローズウッド製を含め49本)。そう言えばつい先日、71年製のD-41の12弦(D12-41)のハカランダボディという私好みのギターを見つけたんですけど、あれは珍しい!今回は買わなかったけど、あんな41は見ただこと無いですよ。あの年であの仕様は、ほとんど作られていないはず(2本製作)。

その12弦は、おそらく先日我々が撮影したギターだと思います。この書籍の中に掲載される予定です(笑)。

あ、そうなんですか・・・。

OM-45とOOO-45もかなり似た仕様ですが、これも両方お持ちですね。

でも、OM-45はプリウォーではなくて、79年製の比較的新しい製品ですよ。やはり45が欲しかったんです。28とかは古いのが手に入り

ましたから。OOO-45とOM-45は確かに同じようにも見えますけど、やはりスケールが長い分OMの方がドレッドノートに近い印象がありますね。音が力強いと言いますか。テンション感もあるし。僕のOM-45は、70年代の末に再生産された中の1本なんですけど、スキャロップ・ブレイシングなので、良く鳴りますよ。ネックも太いから、男っぽいOOOという感じかな。でも僕はOOOも大好きです。そうそう、OOOと言えば、以前友人に頼まれてOOO-21の古いやつを捜したことがあるんです、その時見つかったOOO-21は、メチャクチャ良い音だった。こんなに良いギターなら、自分で買おうかと思ったり(笑)。“シャリ〜”って綺麗に鳴るんです。「中北にギターを捜させると、良いものを見つけてくる」ってよく言われます(笑)。

(笑)プリウォーのOOO-45も1928年製と41年製をお持ちですね。

そうですね。最初は28年の方を買ったんです。でもペグの調子がちょっと悪かったので、新しいパーツに交換しました。フレットも昔のパーフレットだから指にカタカタ引かかるので、しかたなく現代のものにリフレットしました。あれだどうしても弾き難くて・・・。

音は勿論だけど、 形も素晴らしい!

確かにパーフレットは、実際に使用するには・・・。それにしてもずいぶん沢山集めましたね〜(笑)。

そうね・・・。でも若い頃は貧乏学生だったから、ギターを買うためにずいぶんバイトをしました。医学部の先輩から、マーゲンチューブを使って胃液を取り出して提供するという高額のバイトを紹介して貰って、それでSヤイリのギターを買ったりもしました(笑)。そうそう、あとマイナス20度の部屋の中で24時間直腸温測定をして、身体反応を見るという凄くハイリスク、ハイリターンなバイトもあったんですけど、それは流石に止めました。死んじゃいますよ。それをやった友人はいましたけど、留年していました(笑)。

でも、我々の時代は、マーティンはプロギタリストが使うギターであって、アマチュアに手の届く存在では無かったですね・・・。

本当にそうでした。昔ガロが大好きで、ガロのレコードを聴くとギターがめちゃくちゃ良い音なんですよ。で自分が国産ギターで同じように弾くと、全然音が違うんです。まあ、それは自分の腕のせいだっと思ってたけど、彼らと同じ年代のD-45を弾いたら“なんだよギターじゃん!”って(笑)。

(笑)。あの時代は、日本ではガロの影響が強かったですが、クロスビー・スティルス・ナッシュ&ヤングのD-45の音に憧れた人は多かったですね〜。

昔はみんなマーティン・ギターに憧れたんですよ。そうそう、これ見てよこの写真(70年代の雑誌に掲載されている、マーティン・ギターがズラリと並んでいるカワセ楽器店の広告)。凄いでしょ、全部マーティンですよ!田舎から出てきたギター好きの学生がこんな写真を見せられたらやっぱり憧れますよ!で、当時一度カワセに行ったんですけど、そしたらショーケースの中にマーティンがズラッと並んでました。一応値段を聴いたら、もうチビりそうになりました(笑)。

確かにあの時代のマーティンは高価でしたね・・・。良い音のギターはマーティン以外にもいくつもありますが、なぜマーティンを?

だって、音も勿論ですけど、形も素晴らしいでしょ。洗練されているデザインで、色も良いし。他のトラディショナルなギターのように、泥臭さを感じられないですね。良くできていますよ。とにかく若い頃からずっと憧れていましたから。

それはもう、 憧れの固まりです。

一口にヴィンテージと言っても、様々な年代がありますが、やはりマーティンの同じモデルでも、作られた年代が異なれば、音は違いますか?

20年代、30年代、40年代では、みんな音が違いますね。50年代だけは持っていないんですけど、何度も弾いたことはあって、60年代と40年代の中間的な印象です。

僕は40年代のマーティンはあまり弾いたことがないんですが、先ほど40年代のD-28を弾かせて貰ったら、いや〜良いですね!

ね、良いでしょ!30年代はもっと良いけど、今だとかなり高騰しているから、ちょっとね・・・。それに、程度の良い30年代のマーティンはなかなか捜しても出てこないし。

同じ年代の同じモデルでも、キャラクターに違いがありますか?

それはありますね〜。40年代のD-28ヘリンボーンは3本あるけど、1本がスキャロップ・ブレイシングで、2本はノンスキャロップなんですけど、僕が一番好きなのは45年のノンスキャロップのモデルです。

3本ともトーンは異なりますか?

全然違う。みんなスキャロップ・ブレイシングが良いって言うけど、個人的には40年代のD-28は、ノンスキャロップの方が好きですね。スキャロップの方は、5弦6弦の音がブワ〜って出過ぎるんです。バランスがあまり良くないと言うか。でも、OOOの40年代は、逆にスキャロップの方が音が分厚くなります。OOOはスキャロップの方が好きですね。6弦でも5弦でも、スキャロップの方が倍音成分が豊で、綺麗です。トップの振動が豊というか、ふくよかになり、音に深みがあります。79年のOM-45もスキャロップで、それほど古くないですけど良く鳴りますよ。

マーティンのユーザーにはハカランダを好きな人が多いですが、ブラジリアン・ローズウッドとインディアン・ローズウッドでは、どのようにトーンの特徴が異なりますか?

ハカランダは、音の輪郭がハッキリしていると思います、タイトでシャープと言うか。69年のハカランダのD-45と72年のインディアン・ローズウッドのD-45では、作られた時期が3年間しか違わないけど、全然音が違いますよ。弾くとすぐ分かります。72年のインディアン・ローズウッドの方が、特に低音域がブワッと広がっている印象ですね。でもこれは、音が良いか悪いかではないんですよ。僕は72年の45の音は甘くて大好きです。

それにしても、凄くコレクションですね。まだ欲しいマーティンってありますか?

ん〜、欲しい物はかなり持っているからな・・・。もう充分かな・・・。

これだけあったら充分でしょ(笑)。中北さんにとってのマーティン・ギター、特にスタイル45は、どのような存在でしょうか?

それはもう、憧れの固まりですよ。若い頃はお金もなかったんで、ずっと国産のギターを使ってきたけど、マーティンの古いのを弾いてもビックリです。



Martin Collection

Part. 2

それではインタビューに続いて、中北さんのマーティン・コレクションを紹介しよう。30本近いコレクションの中から、24本をセレクトしてお届けする。貴重なヴィンテージ・マーティンとカスタム・マーティンの世界をご堪能頂こう!

01 1969 D-45

sn #244706

D-45は、マーティンのフラッグシップ・モデルとして1933年に登場した。戦前戦中に生産されたD-45は、トータルで91本であるが、1942年の出荷を最後に、生産が中止された。そして再生産が行われたのが1968年の後半である。最初に紹介するのは、再生産が開始された翌年にあたる1969年製。ブラジリアン・ローズウッドによるボディ・バック&サイドを持つマーティン・ファン憧れのモデル。クロスビー・スティルス・ナッシュ・アンド・ヤングやライ・クーダーなど人気ミュージシャンが愛用したことでそのリッチなサウンドが瞬く間に知れ渡り、新しいアコースティック・ギター・シーンの一翼を担う存在となった。中北氏も昔ガロのメンバーが奏でるD-45サウンドに魅せられ憧れていたと言う。ピックガード

は交換されているが、全体のコンディションは良い。重く力強く、そして煌びやかなD-45サウンドは、ドレッドノート・モデルの中でも特有のキャラクターとなっている。

02 1969 D-45

sn #250269

こちらも同じ1969年に生産されたD-45。この年には162本のD-45が生産された(この生産量は同じ年のD-28の約5%に過ぎない)。前出のD-45と比べると、こちらの方がよりワイルドなサウンドで、トーン・キャラクターはかなり異なるという。この時代のマーティン・ギターは、ヘッドストックのエッジ部分がやや丸いのが特徴だが、かなり個体差があり、写真のギターは比較エッジが尖っている。ジャーマン・スプルーストップとブラジリアン・ローズウッドの組み合わせで、典型的な柾目の材を使用している。



03 1972 D-45
sn #309539

3本所有するD-45の中で、最初に購入した1972年製。70年以降に生産されたD-45は、ボディのバック&サイドにインディアン・ローズウッドが採用されている。ピックガードはベッコウ・タイプに交換されているが、大きなキズなどは見られず、良いコンディションが保たれている。サウンドボードは目の詰まったジャーマン・スプルースを使用。前出の2本の69年製D-45と比べるとやや甘めのサウンドだが、そのトーンはとて気に入っていると言う。

04 1969 D-41
sn #255049

オリジナルD-45が登場したのは1933年だが、その姉妹モデルとして知られるD-41が登場



したのは、36年後の1969年のこと。写真はそのデビュー年にあたる1969年製。実は、初年度に生産されたD-41は数が少なく、わずか49本(1969年に生産されたD-45は162本)。その中で写真のようにブラジリアン・ローズウッド・ボディが採用されたD-41は、31本しか存在しない。D-45とD-41の違いは幾つもあるが、1フレット目にヘキサゴン・ポジションマークが見られないのは大きな特徴のひとつ。ヘッドストックのインレイやヘキサゴンなど貝のインレイは、華やかなアパロンではなく、白蝶貝を使用している。

05 1928 000-45
sn #36697

000-45の歴史は古く、その誕生は20世紀の初頭まで遡る。しかし当時のモデルは12フレット・ジョイントにスロテッドヘッドというクラシック・ギターを彷彿とさせるデザインだった。写

真は1928年に生産された000-45。ヘッドストックにはフラッグシップ・モデルを象徴するトーチインレイが施され、面長のボディにピラミッド・ブリッジ、スノウフレックなどのポジション・インレイが使用され、ピックガードは付いていない。見るからにクラシカルなデザインだが、サウンドはこれが000?と思えるほどダイナミックなトーンが大きな魅力となっている。

06 1941 000-45
sn #78653

近年の000ブームの中で、様々なバリエーションの000がリイシューされたため、000-45は見慣れた印象もある。しかし、14フレット・ジョイントの000-45は、戦前1934年から42年までの間に僅か123本しか生産されていない極めて希少な存在である。写真は生産終了となる1年前の1941年に生産された12本の中の1



本。チューナーやピックガード、フィニッシュもオリジナルで、極めてコンディションが良い。ヴィンテージ・ギターというと枯れたサウンドをイメージする人は多いが、煌びやかで明るく若々しいサウンドは、現在の音楽シーンの中でも充分通用する。

07 1979 OM-45 sn #414562

1930年に誕生したオリジナルのOM-45は、4年間に僅か40本しか生産されていないが、1933年にスケール違いのOOO-45に道を譲るようにして生産が中止された。その後1977年から僅かに再生産されるようになったが、87年にまた生産が中止され、近年まで幻のモデルとなった。写真は1979年に生産されたOM-45。オリジナル・モデルをリスペクトする形でスクヤロップド・ブレイシングが採用されている。OM

のネック幅はOOOよりやや幅広く、45ミリ近くある。また、70年代後半から80年代初頭に生産されたOMモデルのピックガードは、写真のように極端に淡い色のベッコウ・タイプが使用されている場合が多い。スクヤロップド・ブレイシングを採用したヴィンテージ・スタイルで製作されている。

08 2001 OOO-42 Custom sn #780524

2001年に生産されたOOO-42のリイシュー・モデル。ボディ・バック&サイドにブラジリアン・ローズウッドを採用したプレミアムな仕様。スタイル45のヘキサゴン・インレイはフラッグシップ・モデルとしての証だが、スタイル42に使用されるスノーフレークやキャッツアイなどのポジション・インレイは、ヴィンテージライクなデザインでリイシュー・モデルでも人気がある。

09 1995 J12-65 sn #551733

ボディにドレッドノートよりややワイドなOOOOサイズ(16インチ・ワイド)を採用し、さらにドレッドノートと同じ深さを持つジャンボ・モデルJ。写真はそのスタイル65仕様の12弦モデル。ボディ・バック&サイドには美しいフィギュアド・メイプルが採用されているのも大きな特徴で、力強く広がりのある12弦サウンドが堪能できる。

10 1991 JC Custom sn #512167

前出の12弦モデルと同じジャンボ・ボディを採用したカッタウェイ・モデル。ネック以外に美しいハワイアンコア材を使用し、ヘッドストック、フィンガーボード、ピックガード、ブリッジなどに豪華絢爛なシェルインレイが施されているという



ゴージャスな仕様。カットウェイ、オーバル・サウンドホール、ハワイアンコア・ボディなど、全てがカスタム仕様で製作されている。

11 1966 D-35 sn #213278

D-35が誕生したのは1965年のこと。D-28の上位モデルとして3ピース・バック。ネックバインディングを採用したモデルとして登場した。3ピース仕様のバックは当時今ひとつ人気が出なかったが、60年代は上質なブラジリアン・ローズウッド材が使用されていて、この仕様のD-35はとても人気がある。ピックガードはベッコウ・タイプに交換されているが、大きなキズも見られず、良いコンディションを保っている。

12 1968 D12-35 sn #240517

こちらは1968年製のD-35の12バージョン。Sタイプと呼ばれる大型のボディを採用し、力強く美しいアコースティック・サウンドを奏でる。ボディ・バック&サイドには、やはり魅力的なブラジリアン・ローズウッドが採用されている。12弦ギター好きの中北氏は、これにミディアム・ゲージの弦を張り、オープンDチューニングで使用している。

13 1943 D-28 sn #84866

中北氏は、12弦モデルを含めるとD-28のヴィンテージを5本所有している。写真は、その中で最も古い1943年製のD-28。ヘリンボーン・トリム、アディロンダック・スプルース・トップ、ブラジリアン・ローズウッド・バック&サイド、スキヤロップド・ブレッシングが採用された申し分のないヴィンテージ仕様。ピックガードを本ベッコウに

交換している。リッチで力強いアコースティック・サウンドは、フラットトップ・モデルの基準として、多くのギタリストの憧れとなっている。

14 1945 D-28 sn #91202

1945年製のD-28。ヘリンボーン・トリム、ストレート・ブレッシングを採用したお気に入りのD-28。力強くしかもバランスの取れたサウンドで、ヴィンテージ・マーティンの醍醐味が堪能できる。ピックガードは本ベッコウに交換されている。写真は掲載しないが、この他にも、1946年製と1967年製のD-28を所有しており、全てブラジリアン・ローズウッド仕様である。

15 1977 D12-28 sn #394661

マーティンで12弦モデルを生産するように



なったのは意外に遅く、60年代半ば。D12-28が登場したのは1970年で、写真のモデルは1977年に生産された。ベーシックな仕様はD-28と共通しているが、ネック幅が広い(ナット部で約47.6mm)だけではなく、スケールがレギュラー・モデルより約12.7mmほど短いことは以外に知られていない。12弦モデル特有の清々しいアコースティック・サウンドは、エフェクターなどでは作り出せない特有の広がりがある。

16 1943 D-18
sn #86354

マーティンを代表するモデルのひとつ、D-18。14フレット・ジョイント仕様のD-18が登場したのは、D-28と同じ1934年のことである。写真は1943年に生産されたモデル。ブリッジが交換され、ネックもリセットされているが、40年代

の希少なヴィンテージで、お気に入りの1本。最もシンプルな仕様のD-18に拘るギタリストは少なくない。

17 1996 D-18 Custom
sn #603394

1996年製のD-18だが、スタイル45に使用する最上級グレードのトップ材を使用してカスタムメイドされたヴィンテージ・リイシュー・モデル。マホガニー・ボディを採用し、よりシンプルにデザインされているが、D-18の温かみのある優しいトーンは多くのギタリストにリスペクトされている。D-18でありながら、D-35に近いニュアンスのサウンドだとか。

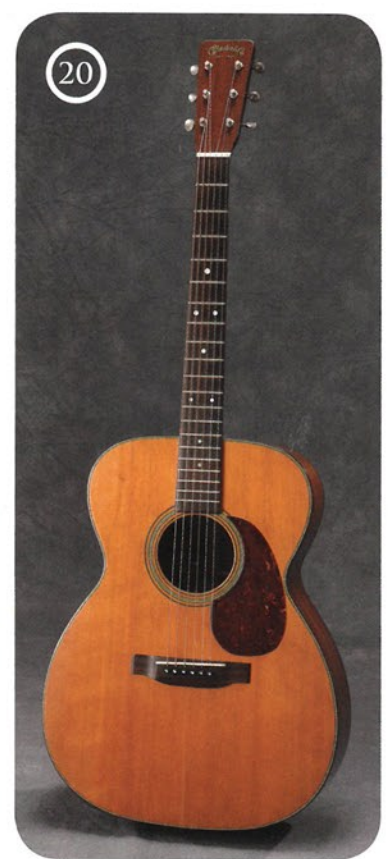
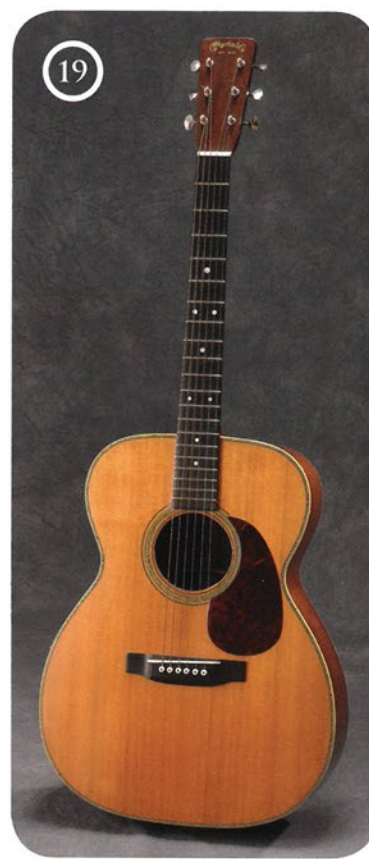
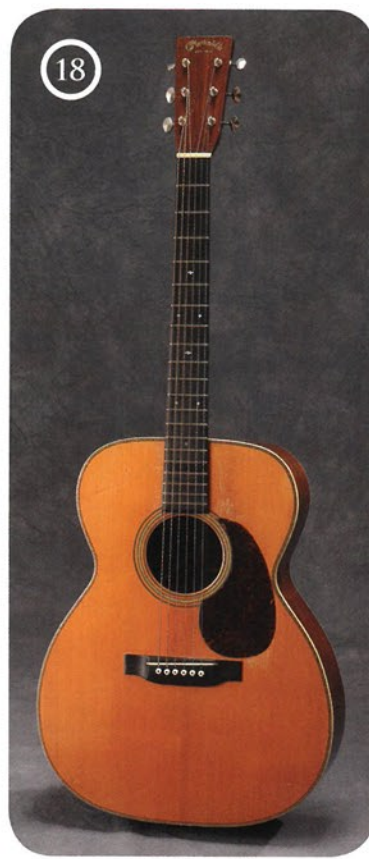
18 1943 000-28
sn #84456

000-28が誕生したのは1903年とその歴史は古く、誕生当初はガット弦を使用した12フレット・ジョイント・モデルだった。14フレット・モデルに変更されたのは1934年。写真は、その9年後に生産された1943年製。バランスの良いトーンと弾きやすいボディ・サイズで、多くの愛用者を誇っている。プリリアントなサウンドを持つお気に入りの1本で、レコーディングでも愛用した。

19 1949 000-28
sn #112450

こちらは1949年に生産された000-28。あるリペアショップにボディの修理を依頼したところ、なんとアクリル塗装でリフィニッシュされるといふトラブルに見舞われたが、現在は再度ラッカー塗装に仕上げ直してある。この年代はストレート・ブレイシングだが、なんと豆カンナを使





用して自分でプレイングをスキャロップにアレンジしているとか・・・。

20 1951 OOO-21
sn #121288

OOO-21は、OOO-28とOOO-18の中間とも言える仕様のモデルで、1938年に登場したが1959年で姿を消した。極めてシンプルな仕様であるが、ボディのバック&サイドにはブラジリアン・ローズウッドが採用されており、ハカランダ好きのギタリストに特に人気がある。中北氏が所有している50年代のマーティンは、これ1本のみ。

21 1942 OOO-18
sn #81319

1942年に生産されたOOO-18。外観はかなり厳しい状態だが、素晴らしいサウンドを聴

かせてくれるお気に入りの1本。数あるOOOモデルの中でも最も音量も大きく、ギター仲間からも絶賛されている。外観はボロいが、ネックのリセットやリフレットなど楽器としてのコンディションはきちっと調整されている。

22 1929 OO-21
sn #38746

マーティン社がパーソン・ピアノからOEM生産を依頼されて1929年に生産した製品。ヘッドストックには、ラーソン・ピアノ・コーポレーションのロゴデカールが貼られたかなりレアな製品。マーティンのOO-21の12フレット・ジョイント・モデルにロゴデカールを貼って出荷している。ブラジリアン・ローズウッド・ボディ、ピラミッド・ブリッジ、スロットッド・ヘッドストックを採用したクラシカルなモデル。

23 1966 OO-21
sn #213681

1966年に生産されたOO-21。基本的には前出の29年製と同じデザインだが、ピックガードの有無とブリッジ形状の違いで、かなり異なった印象を受ける。サウンドは、この66年製の方が低音域がスッキリしているが高音域が粗い。1929年の方がより煌びやかなサウンドを奏でるという。

23 1937 OO-18
sn #67895

ゴールデンエラ時代に生産されたOO-18。良質なエボニー・フィンガーボードを採用し、コンディションも良い。中北氏はもう1本1943年製のOO-18を所有している。

